

作 長屋 のり子

盲いたチュフサンマ

の絶唱

～ その悲歌、哀歌、

そして挽歌 ～

私は樺太アイヌの長老（エカシ）バフンケの姪チュフサンマ
一九一八年五月 雨の朝 パリ芸術橋（ポンデザール）からセーナ川に
身を投じて死んだ夫、ブロニスワフ・ピオトル・ピウスツキを
恋うて 慕って 恋うて 偲んで歌う、私の ひりつくような白鳥の歌。
ニシパ、あなた 聴こえますか？ 果てしない 情動の歌、
ニシパ、聴こえていますか？

故国ポーランドの過酷な政治の歴史から押し出されて
あなたは流刑人としてこの地にやってきた。
この樺太（サハリン）に。私たちの島に。私たちの恩寵の、
長く先祖の守り続けた厳しい 愛しい この島に。
あなたは絶望し荒廃した他の流刑人の誰とも違った。
神から 授かった 生を生き切ろうという意志を
凜然と額に結んで輝きを放ちつづけていた。亡国の不安の、
その黒々とした暴力の記憶を背負いながら ニシパ あなたは違った。
あなたは 他の誰とも 誰とも違った。崇高だった。
世界の不条理、歴史の苛酷さのなかで、
あなたの精神の発条（バネ）は頑丈だった。あなたは ニシパ
そのために この島にやって来たかのように、私たち先住民族に
臆せず親愛をこめて近づいた。あなたの心の底から
こみあげてくるような人懐っこい微笑みを
私達 樺太アイヌの誰もが忘れない。決して忘れない。

ニシパ あなたは比類ない 慈しみをたたえて 私達の
村にやって来た。あなたは熱い情熱と深い畏敬をこめて
私達のエカシに言った。

「私はあなた達を深く知りたい。そして深く学びたい」と。
ロシア学士院の依頼で、私達 民族のことを
学究的に知りたい、調べたいのだ と申し入れた。
学究的なことは 皆目 私には 分からないし、いらぬ。
私達、私達アイヌは 天の恵みを得て ここを原郷と信じて、
美しい原始の慣習を、慎ましく 清楚に この地で 生きつづけてきた。
森羅万象を 神と崇めて 此处で 生きつづけてきた。
神と共にある暮し レラ（風）アンチュプ（月）と共にある暮し
単純な楽器と 精緻な旋律の 神謡のある暮し。
人間の営みへの深い肯定と悲哀との調和を豊かに生きて



長屋のり子
(尾形芳秀撮影)

私達がどこからきたものであるか、そのルーツなど
 考えもしないことだった。私達には不必要だった。
 樺太こそが 私達の生命、私達の精神の美しい原郷。
 私にはただ 日々エカシのもとに通いつづける
 あなたの 不屈の、勇武の精神が ひたすら ひたすら 眩しかった。
 今も 私に 真実大事なのは、あなたにはじめて抱かれた日の
 白鳥湖の あの美しい 峻巖の 湖畔の、風が
 ピキピキと割れた 二月の夕暮れのことだけだ。
 霏々と舞いつづけた 雪（ゆき）が びたりと予感のように止んだ
 あの日のことだけが 身を振じるほどに 懐かしい。
 直角に真冬の夕陽が落ちて、
 分厚い 雲の切れ目が遠く 薄赤く染まっていた。
 白鳥湖の水は 半分凍りついて キシキシ 鳴っていた。
 対岸の岩山は 雪に覆われて氷山のようにだった。
 水際には 四十五億年前、地球が固まった当時
 そのままのように 黒っぽい岩の断層面が 荒々しく
 むきだして 凍っていた。太古そのままに 荒涼と
 張りつめる 極寒の静寂の中に 二人立ちつくして、
 そして ニシパ あの日、あなたは私を不意に抱き寄せた。

あなたは激しく 優しく 私を抱いた。
 あの暗く 深い 夕暮れ、あなたは湖の波だった。
 波のように 私は 抱かれた。私の魂の肌にもまで
 しんしんと染み透（とお）ってくる 不思議な波。
 それは霊気とさえ言って いいもの。
 この寒冷の地で孜々営々と、生命を繋ぎ 紡ぎつづけた
 私達 先住民族への畏敬を込めて
 白鳥湖のほとりで、二月の夕暮れ
 私を 聖なるものを抱くように、愛おしく 狂おしく
 そして大事に 本当に大事に ニシパ、あなたは 私を抱いた。
 私の天（てん）に向かって 放つ声を
 世界一 美しい音楽を湛える声と讃え、
 愛しい 愛しいと 叫びつづけ、美しい神秘のアイヌとさえ
 あなたは あの夕べ 私に囁いた。あの日、あなたが
 ポーランド人の強い魂の力の比類ない証として、私の体内に注いだ
 熱いものは、あれは一体 何だったのでしょ。あの熱源は
 年若い 盲いた今も 私の身体の奥で つんざく悲鳴のように疼きます。
 あの夕暮れ、あなたも 私も 自分の魂の 働きに 本当に素直でした。
 あの湖の辺りの あの、あなたのバルサムの匂いのする
 息が優しく吹きつけられた夕暮れを思うと
 私の心は今日も生々しく 垂直に立つのです。あの夕暮れは
 生命以前の 原始地球の風景の中にもあったもの、
 宇宙全体で ひそかに波打ち続けていたもの、と今は思えます。

静かな 激しい宇宙の慈悲として 私の魂に
 しみ入り、注がれたあなたの血は、やがて
 一九〇四年、長男、愛しい 助造の誕生に結びました。
 助造は きわめて鋭敏な ニシパ あなたの感受性を

そのまま引き継ぎました。賢い 聡明な男の子です。
一九〇五年まで続いた 私達の琴瑟の営み、蜜月の日々。
サハリン東海岸、相浜の海辺、相川と呼ばれた小川のほとり。
アイハマ アイカワ、其処は その地名さえ
愛（アイ）に縁どられた場所。神秘的な光耀のかがよった場所。
今も見えない眼から 涙がにじむほどに
懐かしい 感覚が 身の内を走ります。ニシパが私に
触れた場所の全てが かなしく今も 燃えたちます。

日露戦争のあと、あなたが、独立戦争の絶好の機と 勇躍、
祖国を奪い返すために 鳥が翔つように ポーランドに帰国して、
私はその冬、一人寂しく あなたの面影を深く映す、
娘キヨを生んだのでした。
それから いくつもの春が巡って、駒鳥は群れなして、
私の頭上を 飛び交い 囀ったけれど
ニシパ あなたは帰って来なかった。
祖国を奪い返してから、祖国の独立を果たしてから
「必ず迎えに来る」という ニシパ！ あなたの
疑（まご）うことない真摯な言葉を信じて 私は待った。
あなたの残した識字学校の教師を勤めながら、
私は働きづめ 働いて 待って 待って 待って 待ちつづけた。
湖がさざ波たてるたび、小川がサラサラ流れるたび、
春の小鳥達が鳴き交わすたび、私の心はムックリの音のように
トンコリの音のように さざめいた。

一九一八年、一二三年ぶりに ポーランドが独立を果たしたと、
樺太（サハリン）の白樺林を吹き抜ける薫風が 私に喜々と伝えたけれど、
それで私の血は激しく躍ったけれど、あなたは ニシパ 帰って来なかった。
あゝ その年に あなたがパリでセーヌ川に身を投じ、ミラボー橋の袂で
発見されると 知らされたのは 一九二五年の、
凍った海を裂くように 激しく太陽の昇った日のことです。
呆然と海をみつめていた私に、あなたの弟、ポーランド革命の指揮者
ユゼフ元帥の使者から 丁重に 悲痛にそれはもたらされました。

その朝の海のように 私は真っ二つに切り裂かれました。
その日、私と助造とキヨは 永遠に夫を 父親を 失ったのです。
泣いて 泣いて 溺れ死にでもするように泣いて世界が崩れ落ちました。
これまで屹立しつづけた対岸の冰山が 一瞬にして砕けおちました。
与謝野晶子の詩のように「旅順の城は滅ぶとも
滅びずとも 何ごとぞ……」です。
女には 革命はいらない、大義など、いらないのです。
あれから涙の乾く間なく 悲しみの月日は流れて 今日是一九三四年、
夕暮れのアイハマの海には 赤い波光がきらめいて
私の耳底でザザザと鳴り出します。ニシパ！
交わした たくさんの睦ごと、あなたの振動、私の振動、が鳴ります。
私はあなたに焦がれて 焦がれて 泣きつづけて
今はもう盲となりました。盲いた私には 今、
宇宙から降るこの世のものならぬ澄んだ音が

本当に 聞こえつづけるのです。
 涯ての 涯てから 遥かなるものの呼ぶ声が 本当に聴こえるのです。
 私は今、やっと 気付くのです。
 十六年前、あなたがパリで不慮の死を遂げた日、
 私は夥しい白鳥が まるで天地の運行のように
 悠久に ひたすらに アイコタンの
 夜穹（よぞら）を流れるのを見えています。
 一羽の鳳の鋭く 切なく 親しく、懐かしく
 鳴くのを聞いているのです。クオオー クオオ
 幻聴ではなく あれは まさしく まさしくニシパ あなたでした。
 あなたの かなしい 切り裂く ペウタンケでした。
 命賭した 革命を終えて パリから あなたの魂は
 真っすぐに 一目散に 私と、あなたの潔い血を継ぐ あなたの
 子供達 愛しい愛しい助造とキヨの待つ 樺太（サハリン）に
 帰って来てくれたのです。アイハマに、アイカワに

ニシパ！ ニシパ！
 あなた聴こえますか？
 あなた聴こえていますか？

もうすぐ もうすぐ チュフサンマは ニシパ
 あなたのもとに赴（おもむ）きます。
 私も亦 白い鳳となって ニシパ！ あなたの今過ごす場所
 目指して 飛び翔ちます。
 ニシパ あなたが愛でてやまなかった アイヌの
 美しい旋律で、トンコリのように、ムックリのように
 優美にクオオークオオと 鳴きながら 空に舞います。
 天国（ハライツ）の小鳥たちの囀る岸辺で
 もう一度 あなたに抱かれるために。
 もう一度 あなたに 神秘のアイヌ！と優しく囁いて貰うために。

あなた 聴こえますか？
 樺太アイヌ、チュフサンマの声が
 あなた 聴こえていますか？
 あなた、あなた、聴こえていますね。

この悲痛な絶唱の翌年、一九三五年、チュフサンマ没。ポーランド革命の雄 ブロニスワフ・ピ
 オトル・ピウスツキにその清らかな一生を、全生涯を捧げて、チュフサンマ逝く。

因みに、チュフサンマの樺太アイヌ語の意味は「月から降りてきた女」だそうです。そのことにも
 胸衝かれます。

ブロニスワフ・ピウスツキ没後百年記念の集いにて朗唱
 2018年7月29日、北海道大学学術交流会館小講堂にて
 (動画) <https://www.youtube.com/watch?v=DnPPiKPVVjc&feature=youtu.be>

*本稿は、朗読会「午後のポエジア」7：没後百年記念〈詩劇〉ピウスツキ、2017年5月27日、
 ドラマシアター「ども」にて朗唱した初版の改訂新版です。



Noriko Nagaya
(Photo by
Yoshihide Ogata)

Noriko Nagaya
**A superb song of
Bronisław Piłsudski's
blind wife Chuhsamma**
– Her elegy, lament and
dirge –

I am Chuhsamma, a niece of Ainu Chief (Ekasi) Bafunke of the Ai village (kotan) in Sakhalin.
My husband Bronisław Piotr Piłsudski threw himself into the Seine river
From the Pont des Arts and died in Paris in a rainy morning of May 1918.
I am singing a swan song for him with love and longing in his memory.
Do you hear me, My Husband (Nispa)?
Do you hear my song of endless emotion for you now?

Led by the harsh political history of Poland, pushed out of the homeland,
You came to this island, Sakhalin, as a convict in exile.
Sakhalin is the Ainu's gracious island.
Our ancestors kept protecting this harsh, beloved island for a long time.
You were different from any other convict who despaired and devastated.
You were willing to live the life given by God.
Your will was engraved and kept shining on your forehead.
While carrying an anxiety of the lost country
And the memories of the black violence on the back,
Nispa, you were different from anyone else here. You were sublime.
Amid the absurdity of the world and the severity of history,
Your spiritual initiative was strong and healthy.
You quickly approached to us, indigenous people, with dearly love
As if you came to this island for that purpose.
We, Sakhalin Ainu people, will never forget your friendly smile
Like coming up from the bottom of your heart.

Nispa, you came to our village with unrivaled affection.
You said to our Ekasi with a passion and deep awe –
“I would like to know and learn you deeply.”
At the request of the Russian Academy of Sciences, you asked,
You want to investigate and find out about our races academically.
I know nothing about academic things and I do not need it.
We, Ainu people, gaining the blessings of heaven, believing that here is our original village,
Have been living here the beautiful primitive, modest and neat, custom.
Living with Rera (wind) and Un-cup (Moon),
Living with folk songs sung with simple instruments and elaborate melodies,
Living richly in harmony with deep affirmation and sorrow for human activities,

We have nothing to think about where we came from, its roots, etc.
It is unnecessary to us.
Sakhalin is our life, the beautiful hometown of our spirit.

You kept coming to our Ekasi everyday.
Your indomitable, brave spirit was quite dazzling to me.
The only thing truly important to me now is the dusk of February
When you first embraced me on the beautiful and sharp shore of Swan Lake
Where a stinging wind blew.
I feel truly nostalgic for that day when a small snow was dancing faintly
And then stopped perfectly like prediction.
Midwinter sunset fell straight,
A thick cloud break was far away and dyed light red.
The water of Swan Lake was frozen half and squeaking.
Rocky mountain on the other side was like an iceberg covered with snow.
At the water's edge the faulty surface of the dark rock was exposed roughly and frozen
As it was when the earth became solid 4.5 billion years ago.
In extreme cold and quiet desolation of ancient time
Two of us stood still and you hugged me suddenly that day.

You embraced me intensely and gently.
You were a wave of the lake that dark and deep dusk.
Like a wave I was embraced.
Mysterious waves were penetrating the skin of my soul.
It can be called the breath of the spirit.
With the awe to the indigenous people
Who continued spinning everyday life in this cold place,
By the lake at dusk of February as if holding holy things,
Nispa, you loved me crazily, tenderly and carefully, really cherished me.
That dusk you praised me whispering that my voice shot towards the sky is
The most beautiful music in the world,
Calling me "My Beloved, My Dear," and even "a Beautiful, Mysterious Ainu."
What on earth was that hot things you poured into my body on that day
As an unparalleled proof of the power of the Polish strong soul?
Even now, though I am old and blind,
I feel that heat source throbbing like a scraping scream at the back of my body.
That dusk you and I were both really obedient to our soul's work.
Even today my mind still stands vivid and straight
When I recall that dusk on the banks of the lake
Where your balsam smell was gently blown to me.
Now, that dusk seems to be seen also in the landscape of the primitive earth before life,
Secretly rippling all around the universe.

As a quiet intense mercy of the universe,
Your blood was poured out and bled into my soul,
And eventually, in 1904, led to the birth of my eldest son, dear Sukezo.
Nispa, Sukezo inherited your extremely sharp sensitivity as it was.
He is a wise intelligent boy.

Our honorable couple's work and honey moon days lasted until 1905
On the east coast of Sakhalin, on the seaside of Aihama,
On the banks of a stream called Aikawa.
There, even the names of the places, Aihama and Aikawa, were framed by the word "Love" (Ai)
And mysterious light shined.
Even now tears flow from my invisible eyes and
A nostalgic feeling runs inside of me.
Everywhere Nispa touched me is sad and still burning now.

After the Russo-Japanese War,
With the great opportunity of the independence war,
In order to regain the motherland you bravely left for Poland like a bird flying back.
That winter, I was alone and gave birth
To a daughter Kiyo who deeply reflected your face.
Then several springs came over,
Japanese robins flew and sang in a flock over my head,
But you did not return, Nispa.
I waited for you, believing in your earnest words –
"I'll surely come to pick you up,"
After recovering the homeland, and fulfilling the independence of your country.
While working hard as a teacher of the literacy school you left,
I waited and waited, kept waiting all the while.
Every time the lake ripples, every time the brook sounds,
Whenever spring birds cry, my heart whispered
Like the sound of Mukkuri (Ainu plucked idiophone), like the sound of Tonkori (Ainu zither).

The gentle wind blowing through Sakhalin's white birch forest told me gladly –
In 1918, for the first time in 123 years, Poland regained independence, –
That's why my blood danced fiercely, but you did not return to me, Nispa.
Oh, it was in this year, 1925, on the day,
When the sun rose violently as if ripping the frozen sea,
When I was told that you threw yourself into the Seine river
And were found dead under the Mirabeau bridge in Paris.
It was conveyed politely and sadly from the messenger of your brother,
Marshal Józef Piłsudski, leader of the Polish Revolution.

Like the ripped morning sea I was torn in half.
On that day I, Sukezo and Kiyo lost the husband and father forever.
I cried and cried, cried to drown in tears... and the world fell down.
The iceberg on the opposite shore, which kept standing up so far, fell down in a blink of an eye.
As Akiko Yosano said in her poetry –
"Even if the fortress of Port Arthur will perish, nothing will perish but everything..."
A woman needs neither a revolution, nor its cause.
From that day, I have no time to dry my tears and the days of sorrow flowed.
Today, in 1934, in the sea of Aihama at dusk
The waves are glittering red
And at the bottom of my ears still echoes..., ah, Nispa!
I feel echoes of every mutual exchange, your vibration and my vibration.

I am in love with you, keep loving and crying,
And now I am blind. Now, having got blind, I really keep hearing
A clear sound that is not of this world, falling from the universe.
I really hear a voice calling me from far away, from the end of the universe.
Now I recall finally.
Sixteen years ago, on the day you made an unexpected death in Paris,
I really saw many swans flowing through the night sky over Ai kotan,
Like the everlasting, intensive operation of the heaven and earth.
I heard a sharp and painful, friendly and nostalgic crying of a phoenix – “Quao Quo.”
It was not an illusion, but exactly you, Nispa,
Your sad, tearing cry of emergency – peutanke.
From Paris after betting your life to the revolution
Your soul came back straight to Sakhalin, Aihama, Aikawa,
Where your children, dear, beloved Sukezo and Kiyō,
Who succeed our excellent, thorough blood, are waiting for you.

Nispa! Nispa!
Do you hear me?
Do you hear me now?

Soon, very soon, Nispa,
Chuhsamma will go to you.
I will also become a white phoenix, and fly to you, Nispa,
Aiming for where you are now, Nispa.
With a beautiful melody of the Ainu you loved,
Like the sound of Mukkuri, like the sound of Tonkori,
While singing gracefully “Quao Quo,” I will dance in the sky,
On the paradise, on the shore where the little birds are singing,
In order to be embraced by you again.

Do you hear me?
Do you hear the voice of Sakhalin Ainu Chuhsamma?
Nispa, My Husband, I hope you hear me now.

Next year after the superb song, in 1935, Chuhsamma was dead. Having devoted all her life, all of her lifetime to the hero of Poland Revolution, Bronisław Piotr Piłsudski, Sakhalin Ainu Chuhsamma has passed away.

By the way, it is said that “Chuhsamma” (cuh san mah) in Sakhalin Ainu means “a woman descending from the moon.” This is also moving for me.

Read by Noriko NAGAYA at the Memorial event on Bronisław Piłsudski on the centennial of his death in 1918 (Conference Hall, Hokkaido University, Sapporo, July 29, 2018)
(Video) <https://www.youtube.com/watch?v=DnPPiKPVVjc&feature=youtu.be>

- * This is a revised new version of the first version read by the author in the dramatic poetry “Bronisław Piotr Piłsudski” (Drama Theatre “Domo,” Ebetsu, near Sapporo, May 27, 2017)
- * The original in Japanese was translated into English by Atsushi Ando